

吉良の赤馬

きらのあかうま

浴 革

吉良の赤馬は、西尾に古くから伝わる練物の玩具である。

元禄時代(1688~1704)、吉良荘の領主であった吉良義央(吉良上野介)は、領内に黄金堤を築いたとき、赤毛の愛馬にまたがり巡視にあたった。馬上の義央は威風と温容に満ち、その姿を領民たちは心から喜び、その赤毛の馬を称えたと伝わっている。

この馬が、いつしか「赤馬、赤馬」と呼ばれるようになり、今日まで伝わる「吉良の赤馬」の玩具のモデルになった。

伝承によれば、赤馬の玩具を最初にしたのは^{まだらめ}駿目村の清兵衛である。はじめは木彫で作っていたが、のちに木屑で作るようになったとされる。

天保年間(1830~1844)、赤馬の製作は次の柳右衛門に相伝されたが、この時この玩具は一時的に途絶えてしまう。

しかし、柳右衛門に続く、清助、伊太郎の代のとき、この玩具が「吉良の赤馬」として世に広がるようになり、5代目の田中清一のときには、郷土玩具としてもてはやされるようになった。



以後、赤馬の玩具は代々受け継がれ、今は8代目が製作にあっている。

製品知識

吉良の赤馬は、高さ5センチ前後の練物の型抜きで、耳は竹串をさし、全体に黒味のある紅色が塗られ、鼻と四肢の先には群青、眼とまゆずみ、尾と鞍との間は濃墨が施されている。

かつては紅色の馬のみの製造であったが、趣味愛好家らの要望で、6代目のとき、「白馬」と「吉良の殿様」の商品が加えられた。

生産状況等

赤馬はおが屑と正麩糊を煮て、粘土くらいの硬さにしたあと、それを木型に取り型抜きし、乾かして下塗り、本塗りを繰り返す。糊を使用するため、芯まで乾燥(日陰干し、天日干し)させる必要があり、完成までに最低でも3ヵ月にかかる。

現在、年間200~300個生産されている。



取材協力：吉良赤馬製造元

工業
機械・金属

工業
窯業・土石

工業
本品

工業
繊維

工業
食品

工業
工芸品

工業
郷土玩具

吉良の赤馬

工業
その他

農業
野菜

農業
果樹

農業
花卉

農業
畜産

水産業

三河一刀彫

みかわいっとうぼり

沿 革

日本各地には、伝統工芸として一刀彫が継承されており、それぞれに味わいがある。

西尾の三河一刀彫も地方色が濃く、三河地方に古くから伝わる文化や伝統に題材を求めたものが多くみられる。

三河一刀彫は、当初、神社仏閣の彫刻を手掛けていた彫刻師らが、戦後間もなく郷土芸能を木彫に再現し、観光土産品として彫り上げたのが最初で、歴史的にはまだ新しい。



金太郎

ニマツ、ケヤキなどである。

題材には、金太郎、兜、大名行列、雛のほか、日本最古の万歳として全国的に知られる三河万歳、干支などを取り上げている。

彩色する場合としない場合がある。

観光土産品の印象が強いが、縁起物として贈り物や置物にも喜ばれている。

最近では彫刻作品として、作品展に出品されることもある。

特 徴

一刀彫りの特徴は、なんといっても鋭い鑿味である。木肌を最大限に生かし、大胆かつ荒削りな鑿使いは、作品の単純化された構図によって一層力強さが強調される。

もちろん、一刀彫といっても最初から最後まで1本の鑿で彫り上げるのではなく、数本の鑿を適宜使い分ける。

製 品 知 識

材料に使われる木は、主にクスノキ、ベ

製作工程

- 木 取 り** 丸太の面に直接下絵を描く。
- ▼
- 荒 彫 り** 余分な箇所はノコギリで断裁し、鑿で大まかな輪郭を形作る。
- ▼
- 仕上げ彫り** 数本の鑿を使い分け仕上げる。
- ▼
- 色 付 け** 全て手描きで鮮やかな色彩のものが多い。
- ▼
- 完 成**



三河一刀彫の作品：左から兜、大名行列、内裏雛

取材協力：神谷彫刻所（西尾市） ☎0563-57-3677

工業
機械・金属

工業
窯業・土石

工業
木製品

工業
繊維

工業
食品

工業
工芸品

工業
郷土玩具
三河一刀彫

工業
その他

農業
野菜

農業
果樹

農業
花卉

農業
畜産

水産業

西尾の土鈴 (きらら鈴)

にしおのどれい (きららすず)

沿 革

西尾周辺の日々は、古くから雲母が採れた。とくに八ッ面山の雲母は良質で、その真価は広く認められ、『続日本紀』には和銅6年(713)に三河より朝廷に雲母を献じたことが記されている。

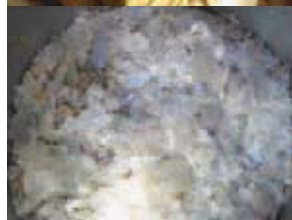
雲母は、京阪神地域に運ばれ、主に紙に漉き込み、屏風、襖、扇などの装飾に利用、珍重されたが、明治の頃には、ほとんどが掘り尽くされ、やがて発掘人夫に犠牲者が出たのをきっかけに、千数百年つづいた採掘は中止された。

西尾において、土鈴「きらら鈴」が作られるようになったのは、採掘が終わった頃からである。加藤熊蔵の手によるきらら鈴は、採掘で犠牲となった霊を慰めるため、村祭りなどで木の枝にぶら下げて御魂を迎えたといわれている。

きらら鈴は、そのあと一時断絶したが、戦後、松田実氏が復活させ、現在に受け継がれている。



作業風景



雲母



きらら鈴

製品知識

素焼き(八ッ面焼)の土鈴に雲母を散りばめたものが、きらら鈴である。きらら鈴はコロコロと柔らかくやさしい手作りの音がし、「愛と幸せを迎える幸福のシンボル」として広く人々に愛玩されている。

土鈴を作るには型を使う「型込め」「流し込め」「手押し」の各方法と、掌と指先だけで作る「捻り」の方法があり、きらら鈴は基本的に捻りで作られる。

旧吉良町の「吉良」という地名は雲母の大和言葉よみである「きらら」ないしは「きら」が語源とされている。

きらら鈴の製作過程

- 原料を干す 原料は互用の粘土。大体、1週間ぐらい干す。
- 細かく砕く 槌を使う。
- ふるいにかける 水にひたし余分なものを取り除く。
- 素焼き鉢で干す 適当な硬さになるまで干す。(6ヵ月~1年)
- 練り込む 練り込んだあと、1ヵ月以上寝かせる。
- 「手捻り」をする 鈴の形を作る。この時、雲母を入れる。
- 天日で干す 大きさによるが、3日から1週間ぐらい干す。
- 窯に入れ焼く 800度から900度ぐらいの温度で約20時間焼く。
- 絵付け
- 紐付け
- きらら鈴

取材協力：松田民芸品(西尾市) ☎0563-56-3574

小坂井の風車

こざかいのかざぐるま

沿革

小坂井の風車〔三河国 式内菟足神社郷土玩具〕は、文化・文政年間（1804～1818・1818～1830）には、すでに盛んに作られていたとされ、今では民芸品として知られている。

豊川市小坂井町に菟足神社がある。菟足神社は風に対する民間信仰をもとにした神社で、風に霊験あらたかな神社として祀られている。この神社で“風の神様のお祭り”として風まつりと呼ばれる祭事が行われており、この連想から風車が作られるようになったと伝えられている。

小坂井の風車は、菟足神社で売られたものが最初だが、近郊近在の神社の祭礼でも売られるようになり、いつしか三河の風車と呼ばれるようになった。

製品知識

小坂井の風車は、経木（杉や檜などを紙のように薄く削ったもの）細工で、羽根、柄ともに檜材を用いる。郷土玩具としての風車は各地に点在するが、経木を使用する風車はめずらしく、小坂井のものだけといわれている。

回りやすくするために反り返るように作られた6枚の羽根の厚さは、およそ0.8ミリ。羽根1枚1枚に描かれた米俵は、「一反の田んぼから六俵の米がとれる」豊作を意味している。六俵は「無病」に通じている。

心棒の先のガラガラは打ち出の小槌を表し、この中には小豆や大豆などの豆類が入っており、羽根が回るとカラカラと軽快

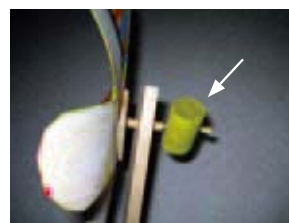


な音を響かせる。豆は「まめ（健康）」を想起し、仕事や商売、お金が風車のようによく回り商売繁盛、豊作の縁起物として珍重されている。

生産状況

以前、小坂井には風車を作る職人が多くいたが、昭和初期以降は風車職人が徐々に少なくなっており、現在は小坂井風車保存会の7人が作っている。

最近では、行政面からの協力もあり、学校や公民館などで子供たちに風車の作り方の体験授業を行い、普及と伝承に努めている。



ガラガラ

打ち出の小槌を表している。豆類が入っており、羽根の回転に合わせて軽快な音が鳴る。

取材協力：小坂井風車保存会（豊川市） ☎0533-72-3403

工業
機械・金属

工業
窯業・土石

工業
木制品

工業
繊維

工業
食品

工業
工芸品

工業
郷土玩具
小坂井の風車

工業
その他

農業
野菜

農業
果樹

農業
花卉

農業
畜産

水産業

土人形

つちにんぎょう

犬乗童子の土人形

製作中の杉浦氏



● おっかわ 乙川土人形 (半田市)

沿革・特徴

乙川人形は今から200年ほど前、文化・文政(1804~1818・1818~1830)の頃、飛脚業をしていた杉浦伊佐衛門(初代)が京都往来の折、伏見人形に惹かれ、その技をひそかに学び、苦勞の末、作り出したものである。東海地方の土人形のなかでは、乙川人形はもっとも歴史が古い。

乙川人形の特徴は、一つひとつ心を込めて丁寧^{ていねい}に仕上げる手づくり^{てづくり}にあり、土人形特有の素朴^{すぼく}で深みのある味わいは、全国の

人々に親しまれた。

もっとも盛んに作られていたのは、4代目の佐市郎(明治11年生まれ)の頃までのことで、当時は300種ほどの人形があったという。

現在は6代目の杉浦實氏が製作している。

● 旭土人形 (碧南市)

沿革・特徴

かつて三河地方の農家では冬の間、土人形を作った。豊橋、国府、田原、岡崎、岩津、矢作、西尾、新川、棚尾、大浜、旭、などがその主な産地であったが、なかでも新川、棚尾、大浜、旭の碧南地域は、とくに製作が盛んで、この地域だけでも作者が30人もいたという。

いまは大変に少なくなっているが、土人

形づくりが続いている産地もあり、このうち旭土人形は高山八郎氏が継承している。

旭土人形の創始者は高山市太郎(明治5年生まれ)。碧海郡志貴崎村に住んでいた市太郎は、14歳の時、農閑期を利用して、豊橋の杉浦幸次郎に土人形を習い、明治23年頃から作り始めたとされている。

この土人形の特徴は、武者や飾り雛など素朴なつくり^{つくり}に、赤や緑の鮮やかな彩色を施すところにあり、地元では「おほこ」とも呼ばれ、愛好家らに好評を得ている。



彩色中の高山氏



取材協力：乙川人形店(半田市) ☎0569-21-5056
高山八郎氏(碧南市) ☎0566-41-5110